

文法化と中和：虚辞 *There* からの眺望

登 田 龍 彦

Grammaticalization and Neutralization : A View from the Expletive *There*

Tatsuhiko TODA

(Received October 3, 2005)

1. はじめに

本稿は、文法化 (grammaticalization) の視点から虚辞の *there* の発達について記述することを目的とする。本稿は、また日英語における文法化と意味変化の比較対照研究の序章として位置づけられるものである。¹ 本稿の主張の骨子は、虚辞の *there* の発達は「中和」(neutralization) 現象として捉えられるというものである。本稿の構成は以下の通りである。まず、虚辞の *there* の意味の有無について考察し、虚辞の *there* が生起する *there* 構文と虚辞の *there* が生起しない構文の間の相違について議論する。第二に、虚辞の *there* の発達を多義性 (polysemy) や同音異義性 (homonymy) というよりもむしろ「中和」現象として捉えることがより生産的であると主張する。最後に、議論をまとめる。

2. 虚辞の *there* の意味

荒木 (1999) は、虚辞 (expletive) を以下のように定義している。

(1) 意味内容をもたず、文の形式を整える形式主語や形式目的語としてのみ機能する代名詞をいう。存在の *there*, 予備の *it*, 環境の *it* などが含まれる。expletive pronoun (虚辞代名詞) ともいう。²

まず、(1) の定義に則して存在の *there* の具体例 (2b,d) を考えてみよう。

- (2)
- a.(?) A personal computer is on the desk.
 - b. There is a personal computer on the desk.
 - c. On the desk is a personal computer.
 - d. On the desk there is a personal computer.
 - e. The desk has a personal computer on it.
 - f. I (can) see a personal computer on the desk.

(2a) は問題の虚辞の *there* の無い存在文である。(2b) は典型的な虚辞の *there* を使用した存在構文であるのに対して、(2c) は (2a) において場所語句 *on the table* の前置に伴う倒置が生じている文である。(2d) は (2b) に場所語句の前置が生じている文である。³ (2e) は存在の概念を所有動詞 *have* の所有構文で表したものである。(2f) は知覚動詞 *see* でパソコンの存在知覚を表現したものである。(2) の (a) から (f) までの6つの文は、全て「パソコンが机 (の上) にある。」という意味を表している点で、知的に同義 (cognitively synonymous) であると言える。ここでは、特に *there* それ自体の意味の有無について触れておきたい。

(1) の定義にあるように、虚辞は「意味内容をもたず」となっている。確かに問題の *there* には「そこに」という場所の副詞的意味は無い。が、ここで言う「意味内容」が問題となる。「意味」には、二つの意味があると言える。一つは、生成文法 (generative grammar) の専ら研究対象とされる文法 (sentence grammar) で言うところの意味論的意味であり、もう一つは語用論 (pragmatics)・談話文法 (discourse grammar) における語用論的・談話的意味である。意味論的意味は、場面に依存しない文字通りの一定不変の意味 (すなわち語彙的意味 (lexical meaning)) を示すのに対して、語用論的・談話的意味は場面に依存した意味を示す。例えば、(3) にお

ける助動詞 can の用法を見よう。

- (3) a. A: Can you pass me the salt?
B: Yes, I can.
b. A: Can you pass me the salt?
B: Here you are.

(3aA) の場面では、塩を渡す能力を問うているのに対して、(3bA) の場面では、その能力確認でなく「塩の手渡し」の依頼をしている。すなわち、前者の疑問文は意味論的意味を表しているが、後者の疑問文は語用論的・談話的意味を表している。

問題の there は、(2b) の on the desk が副詞の there に置き代わった There is a personal computer there. のように副詞と共に起可能である。また、発音も副詞のような強形でなく弱形であることから、問題の there は場所の「そこに」という文字通りの意味論的意味を表していない。それでは、(3b) における Can you で始まる疑問文が依頼を表すように、there も語用論的・談話的意味をあらわすのかどうか考察する必要があるように思える。これを検証するには、虚辞の there の有無に関して最小対 (minimal pair) を成す問題の (2) の (a) と (b) の間の意味の相違と (c) と (d) の間の意味の相違が存在するのかどうか、もし存在するならばそれはどのレベルの意味で存在し、その意味の違いは虚辞の there それ自体に依るものであるのかそれとも構文全体に依るものなのかを明らかにしなければならない。

Bolinger(1977: 92-4) は、(4) に示すような分布を挙げて there is 構文は「何かを意識に上せる」という提示機能を持ち、虚辞の there それ自体に抽象的な場所的意味があると述べている。

- (4) a. *As I recall, across the street is a grocery.
b. As I recall, across the street there's a grocery.
c. As you can see, across the street is a grocery.
d. *I can see that across the street is a grocery.
e. I can see that across the street there's a grocery.

(4a,b,d,e) から窺えるように、通りの向こうに食料雑貨店があることが心に思い浮かんだり、食料雑貨店が眼前に無い場合には、虚辞の there が必要である。一方、(4c) のように眼前に食料雑貨店の存在を知覚できる場合には、虚辞の there は必要ない。⁴

(4) の用例は場所語句の前置を伴う (2c,d) の型の場合であるが、(2a,b) 型の場合も、(5)-(6) に示すように最小対における容認性の相違が見られる (用例中の * と # の各記号は、出典は異なるが、文法性 (grammaticality) ではなく容認性 (acceptability) における不適切さを表している)。

- (5) a. A: Who's in the next room?
B: John and Mary are.
b. A: What's for supper tonight?
B: *Bread and beans are.
B: There's bread and beans. (Bolinger 1977: 93)
- (6) A: Is Alice there?
B: There is no Alice here.
B: #Alice isn't here.
B: #She isn't here.
B: #No. (Lambrecht 1994:158-9)

(5a) の場合は、隣に誰がいることは分かっているがその正体が問題になっている。これに対して、(5b) の場合は夕食に何が出されるのか分かっていないので、その点を先ず確定することが問題になっている。(6) の場合は、話者 A が電話番号を間違えて話者 B の知らない人物と話したいと電話している場面である。この場合、Alice というのは、指示表現であるが、話者 B は知らないので話題として確立していないことになる。従って、(5) の場合と同様に、話題確立のために先ず虚辞の there の構文が必要になる。

(4)-(6) に見られる虚辞の there の有無による容認性の相違は、Bolinger も主張する抽象的な場所的意味の there を主語に持つ構文全体の提示機能に帰するものと考えて良いように思える。この場合、虚辞の定義 (1) にある「意味内容」というのは、具体的な場所副詞の「そこに」というような語彙的意味を指しているもので、問題の抽象的な場所的意味を指さないと考えた方が良い。では、there を虚辞として認定したとしても、この抽象的意味

は意味論的意味なのかそれとも語用論的・談話的意味なのかを更に考える必要がある。(4)-(6)における場面は、眼前に知覚可能であるのかどうかあるいは談話において既に話題として確立されているのかどうかという語用論的側面の強いものである。これからすると、虚辞の抽象的意味は語用論的・談話的意味と関わる意味と解釈した方が良いように思える。

しかし、(7) のような分布はどのように考えたらよいであろうか。

- (7) a.(?) A personal computer is on the desk.
 b. There is a personal computer on the desk.
 c. *An unpleasant smell is in the air.
 d. There is an unpleasant smell in the air.
 e. An unpleasant smell remains in the air.
 f. One performance is at noon.
 g. There's one performance at noon.
 h. *A fireworks display is tonight.
 i. There's a fireworks display tonight.

中右 (1998) と Huddleston and Pullum (2002) で指摘されているように、一般的に虚辞の *there* が生起しない文ではその意味上の (論理的) 主語は具体的な目に見えるものではなくてはならない。(7a) のパソコンのように目に見えれば存在しているのは明白であり、故に虚辞の *there* は不必要である。(7c, d) から窺えるように、*there* 構文では、「嫌な臭い」等の無形物を意味上の主語にすることが可能である。このような相違は、何に帰すべきものであろうか。虚辞の *there* の場所的意味の抽象性が、無形の意味上の主語の存在を保証・認可するが、(7c) にはそれを認可するものがない、と考えられない。何故なら、(7b) において、パソコンの具体的な意味要素と虚辞の *there* の抽象的意味の整合性がないからである。また、(2c) において、意味論的に「嫌な臭い」の無形物は空中に漂うことができないとは言えない。何故なら、(7e) は「嫌な臭いが空気中に漂っている」ことを表しているからである。この場合、*remain* という動詞の力によって臭いの存在が保証されている。臭いが残存するためには発話以前から存在していることを意味している。Huddleston and Pullum (2002:1397) は、(7f) では *one performance* という表現は不定で抽象的であるが、それが例えば「白鳥の湖」の公演のものであるということが先行文脈で確立されていることが必要であり、この場合にはそうであるので適切であると主張している。一方、(7h) においては花火の催しを話題とするものが先行文脈で確立しているとは言い難く不適切となる。⁵

以上の点を考慮すると、虚辞の *there* の意味は、仮に存在すると仮定しても、意味論的意味というより語用論的・談話的意味と言う他ない。更に構文的視点 (constructional view) に立って言えば、「虚辞の *there* と *be* 動詞と意味上の主語名詞句と (場所語句と)」の連続からなる構文全体で、提示機能を持つと考えるのが穏当であろう。特に、虚辞の *there* と *be* 動詞の連続が一つのまとまりを持って “*exist*” と再解釈されて、問題の提示機能の根幹を担っていると言えよう。その間接的証拠として、(8) に見られる事実が挙げられる。

- (8) a. An unpleasant smell remains in the air. (= (7e))
 b. God is (=exists).
 c. Whatever is (=exists), is right.

(8a) において、*be* 動詞でなく *remain* という「残存する」という一般動詞であれば、たとえ無形の主語であっても容認される。同様に、(8b) と (8c) において、無形の「神」や「物は何でも」などを主語として認可しているのは、*exist* と同義の *be* 動詞であって繫辞 (copula) の *be* 動詞ではない。

更に、問題の *there be* の *be* 動詞の統語的振る舞いを観察すると、この *be* 動詞は単なる叙述を示す繫辞ではなくて *exist* と同義と考えた方が良いように思える場合がある。(9) を見てみよう。

- (9) a. I believe John (to be) a fool.
 b. I believe there to be three cows in the garden.
 c. *I believe there three cows in the garden. (Rothstein 1987: 234)

Believe の補部の不定詞節では、*John is a fool* の繫辞の *be* は省略できるが、問題の *there* と共起する *be* 動詞は省略できない (cf. (9c)). 虚辞の *there* と共起する *be* 動詞は、虚辞の抽象的な場所的意味と融合して存在を表す一般動詞として再解釈されると考えられる。つまり、(7d) の *There is* は “*exists*” と再解釈され、(8a) の *remains* と同様に無形主語名詞句 *an unpleasant smell* の存在を認可する。⁶

次に、虚辞の *there* と虚辞の *it* の相違はあるのかどうか、もしあるとすればどのような相違なのかを考えてみ

よう。

虚辞の *there* は、明らかに副詞の *there* から文法化した代名詞であるが、虚辞の *it* は元來代名詞である。文法化における範疇間の変化の傾向として、名詞と動詞のような大範疇 (major category) から代名詞や前置詞のような小範疇 (minor category) へと推移すると言われている (Hopper and Traugott 2003:107)。形容詞と副詞は、両範疇の中間に位置づけられていて、問題の副詞から虚辞代名詞への範疇の変化はこの傾向に従っている。但し、*there* はそれ自身、起源的にはインドヨーロッパ祖語 (指示代名詞 *to- + 添え字 -r) まで遡ることができる。この指示代名詞から副詞への変化は明らかにこの傾向への反例ではあるが、傾向は規則とは違い、例外を認めるものである。では、*there* と *it* の文法化の度合いに違いはあるだろうか。意味内容の保持の観点から考えてみよう。

代名詞的照応形 (pronominal anaphor) の PRO のコントローラー (controller) は何らかの意味役割 (semantic role) を持つ項 (argument) と考えられている。It の特に天候を表す場合は、*there* とは異なり、PRO のコントローラーになることができる。

- (10) a. It sometimes rains after snowing.
 b. It often clears up here right after being snowing heavily. (Chomsky 1981: 324)
 c. *There is often a party here right after being a wake. (Svenonius 2002: 6)

(10a,b) の *after* 節の主語 PRO のコントローラーは主節主語の *it* である。故に、Chomsky (1981:324) は天候の *it* を疑似項 (quasi-argument) と命名した。一方、*there* は、(10c) から分かるように PRO のコントローラーになることはできない。⁷ このことから、*there* と *it* はその虚辞性に関して若干の相違が見られることが分かる。英語においては、このように *there* と *it* は異なるふるまいを示すが、他のゲルマン諸語ではどうであろうか。

Vikner (1995: 224-67) は、Hoekstra (1983) と Bennis (1986) と同様に、疑似項は項と同様に主題 (意味) 役割を付与されねばならないが、虚辞主語 (expletive subject) は決して主題 (意味) 役割を付与されてはいけなく、と主張している。Vikner によれば、ゲルマン諸語における疑似項と *there* のような虚辞主語の間の相違には以下の三つの可能性がある。

- (11) a. 相違なし：ノルウェー語、スウェーデン語、ロマンス諸語 (イタリア語)
 b. 相違あり：デンマーク語、オランダ語、英語
 c. ある環境下で相違あり：ドイツ語、イディッシュ語、アイスランド語

本稿では、議論上 (11b) の場合の具体例を以下に挙げる (デンマーク語 (12) とオランダ語 (13) の各例は、英語 (14) のそれぞれの例文番号に対応している)。

- (12) a. Det / *Der er for dyrt. (det = det her maleri)
 b. Det / *Der regner.
 c. Det / *Der er godt at du er kommet.
 d. *Det / Der er kommet en dreng. (デンマーク語)
 (13) a. Het / *Er is te duur. (hat = dit kunstwerk)
 b. Het / *Er regent.
 c. Het / *Er is goed dat jij gekpmen bent.
 d. *Het / Er is een jongen gekomen. (オランダ語)
 (14) a. It / *There is too expensive. (it = this painting)
 b. It / *There rains.
 c. It / *There is good that you came.
 d. *It / There has arrived a boy.
 e. *It / There is a boy outside the door. (英語) (Vikner 1995: 225)

(a) の主語は代名詞用法の項、(b) と (c) の主語は疑似項、そして (d) (および (14e)) の主語は虚辞である。(12)-(14) から明らかのように、疑似項の *it* と虚辞の *there* は相補分布を形成している。⁸ 英語と対照言語学的に無関係な日本語に虚辞が存在するのかどうかという問題は、日本語の主語の存在と同じく、議論の余地がある。が、本稿では日本語には虚辞主語は存在しないと仮定し、以下議論を進めていくことにする。⁹

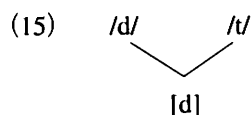
3. 多義性 (polysemy) と同音異義性 (homonymy) と中和 (neutralization)

虚辞の there は、副詞の there から文法化によって派生したと言えるが、¹⁰ 両語の語義的な関係は果たしてどのように記述できるのだろうか。同音異義と呼ぶべきか多義と呼ぶべきかについては、少し議論をする必要がある。先ず第一に言えることは、両語は厳密には同音ではない。虚辞の there は弱形の [ðəɹ], 副詞の there は強形の [ðɛɹ] と発音する。第二に、両者は、全く異なる意味つまり「外延」(extension) を表している。それはちょうど、英語の volley を日本語では排球の「バレー」と庭球や蹴球における「ボレー」と区別して表記し、それらの意味が異なるのと似ている。しかし、この種の音の相違は、主語位置であるのか無いのかという環境によって生じ、一種の異音 (allophone) と考えることも可能である。本稿では、議論の都合上虚辞の there と副詞の there は異音であると仮定して、同音異義性 (homonymy) と多義性 (polysemy) の問題について考察する。

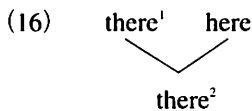
The *Oxford English Dictionary* (OED) は、同音異義語を「同音であるが意味が異なる語 “words having the same sound, but different in meaning”」と定義している。この OED の定義において、綴り字が同じで同音の場合の狭義的解釈と綴り字が異なるが同音の場合の広義的解釈がある。前者には ball (球, 舞踏会) と bear (熊, 運ぶ) 等があり、後者には sea と see, bury と berry 等がある。Traugott and Dasher (2002:14) は、問題となる語に何の意味関係も存在しない場合にのみ同音異義性を仮定すべきであり、歴史言語学者にとっての方法論上の問題は、問題の多義的意味がその関係を消失して同音異義語として認識された時期を査定することである、と主張している。例えば、彼らは、well の「よく、適切に」という意味とためらいを示す談話標識 (discourse marker) や話の展開の試みなどとしての「ええと、さて、ところで」等の意味は、初期近代英語期頃に違いが生じたようであるが、現代英語のほとんどの話者は問題の二語は同音異義語として見なすであろう、と言っている (Traugott and Dasher (2002:15, 175-6))。我々は、普通日常言語生活において、ことばの歴史的起源についてほとんど意識していない。このような場合には、多義と同音異義の区別は (歴史) 言語学者以外には有意義とは言えない。しかし、問題の副詞の there と虚辞の there の場合は、どのように多義性あるいは同音異義性を判断すれば良いのだろうか。

周知のように、虚辞の there と副詞の there の相違は、主語としての資格をはじめ統語的な分布に関して明白である。が、ここで問題となるのは、両者の意味が異なるかどうかという点である。Bolinger が仮定した虚辞の there の抽象的な意味と副詞の具体的な場所の意味の間に、意味関係が存在しないのかどうか。あるいは、現代英語の話者は、両語の間に意味関係が存在すると認知しているのかどうか、といったことである。副詞から虚辞への文法化の際には、語彙の意味の漂白化 (bleaching) が起こっているが、その結果生じる文法的な意味機能には、意味論的意味とは呼ばないまでも談話的・語用論的意味が存在することは既に見たところである。しかし、ここで注意すべきことは、well の様態の副詞「よく、適切に」と談話標識の「ええと」の場合は両語とも語彙的意味を持っているのに対して、虚辞の there には談話的・語用論的意味はあるが語彙的意味はないことは明白である。このように考えると、問題の虚辞の there と副詞の there の意味関係は、語彙内容的な関係ではない。が、何らかの関係を保持していると言うことはできる。従って、この文法化に伴う意味変化は多義性や同音異義性という概念で特徴づけることはあまり生産性があるとは思えない。本稿では、両語の文法的・意味的關係を中和 (neutralization) という概念を援用することによってより生産的かつ自然に記述できると主張したい。

中和という概念は、プーラーグ学派の機能音韻論 (functional phonology) や生成音韻論 (generative phonology) 等で使用され始めたものである。コペンハーゲン学派の言理学 (glossematics) では、中和を融合 (syncretism) と呼んでいる。¹¹ 中和の中でもとりわけ本稿で援用する概念は、Kiparsky (1968) の意味における文脈的中和 (contextual neutralization) である。例えば、ride と write という動詞における /d/ と /t/ の音素対立が、名詞形の rider と writer の両方が米方言で [d] と発音されて中和されるというものである。つまり、ある環境下で存在していた音素対立が、別の特定の環境下で消失してしまう過程を文脈的中和という。¹² これは (15) のように図示できる。



問題の虚辞の there と副詞の there を (15) に当て嵌めてみると、(16) になる。



本稿では、便宜上副詞の *here* と対立する副詞の *there* を上付き数字1を付けて *there'* と表記し、虚辞の *there* を上付き数字2を付けて *there²* と表記して区別する。(15) と (16) の平行関係からも明らかのように、ここでは虚辞の *there* を中和した *there²* と見なす。問題となる環境は、主語位置である。この位置では、副詞的位置における意味論的対立が消失して、中和した(抽象的な)場所の意味が生じる。ここで重要なのは、副詞 *there'* と虚辞代名詞 *there²* は、音素 /d/ と音声 [d] が異なるのと同様にレベルの異なるものであるという点である。

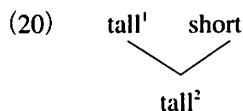
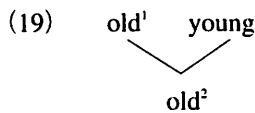
本稿では、問題の虚辞の *there* は場所の指示副詞が意味の漂白 (semantic bleaching) によって文法化した要素すなわち抽象的な場所を示すと考える。抽象的な場所は、無限のあらゆる場所を包含できる無限の空間でなくてはならない。それには、遠近による「幅」の存在が不可欠となり、話し手に近接的な *here* では遠方を含む無限の空間を指示することは不可能となる。例えば、抽象的な場所 *there²* は、(17) に示す *here, on the table, there'*, *in Boston, in Mars* 等の場所を包含することになる。

(17) *There²: here – on the table – there' – in Boston – in Mars* →

従って、(18) における *on the desk* は、抽象的な場所 *there* の具体的な場所と言える。

(18) *There is a personal computer on the desk.*

(16) のような図式は、以下に示すような年齢、高さ等の度量 (measure) を表す形容詞 *old, tall* 等の場合と平行的である。



形容詞 *old* と *tall* は、問題の *there* が抽象的な存在の場所を示すのと同様に、年齢や背の高さについての問答の場合の度量の尺度として使用される (cf.(21)). この場合の *old²* と *tall²* は、*young* と *short* との対立を示さず、無標 (unmarked) と呼ばれている。本稿では、それらをそれぞれ「抽象的な歳の場合」、「抽象的な高さの場合」と考えることもできるので、中和の一形式と仮定する。

(21) a. *How old is your car? → My car is seventeen (years old).*

b. *How tall is she? → She is five feet (tall).*

(21a,b) における返答の *seventeen* と *five* は具体的な歳と高さの目盛りの中のある場所を示している。従って、*old²* と *tall²* においても、問題の *there²* の場合 (17) と同様に (22) のような関係が成立する。¹³

(22) a. *old²: 1-17- 50 – 80 – 100 (years old) →*

b. *tall²: 1 – 5- 18- 50 – 80 – 100 (feet tall) →*

以上、虚辞の *there* を一つの中和形と見なすことを提案した。次に、何故虚辞として副詞の *here* でなく *there* が選ばれたのかを問わねばならない。この問いに対する解答を試みているのは、筆者の知るところ、Lakoff (1987) のみのようである。Lakoff (1987:549) は、存在構文に *here* でなく *there* を概念的な実体が生起する媒体となる空間すなわちメンタル・スペースとして選択する理由は二つあると述べている。第一の理由は、その空間は実体が前景化する際の背景と化して遠方に (distal) にあるものとして理解されるので、近接の (proximal) *here* でなく遠方の (distal) *there* が選択される、というものである。

第二の理由は、二項対立 (binary contrast) が排除される場合は無標のメンバーが選択されるのが最も自然であるという有標性に係わるものである。つまり、*there* が *here* よりも子どもの言葉に早く出現し、そしてはるかに頻繁に起るため、無標のメンバーとして選択されると説明している。

Lakoff の説明は、二つの点で不備である。まず第一に、メンタル・スペースにおける背景化と遠方性を結合しているが、その関係が不明解である。何故なら、*Here is a pencil.* という直示文においても、実体の鉛筆が前景化し、空間「ここに」が背景化していると考えられる。もしそうであれば、背景化する空間に近接の *here* も生起可能と言える。第二に、*here* と *there* の実際の言語習得に関するデータが示されていない。¹⁴

英語の *there* 構文の言語習得について Johnson (2001) が興味深い主張をしているので、ここで取り上げて吟味

してみる。Johnson は、子供は中心的直示文を基にして中心的存在文を習得すると主張し、このことを構文のグラウンド化 (constructional grounding) の視点から言語習得過程のデータを振り所にして議論している。例えば、言語習得過程において、2 歳頃に生じる両構文の特性を併せ持つ発話すなわち直示文の there にストレスの無い重複発話 (overlap utterances) が存在し、重要な意義を持つと指摘している。そのようなストレスの無い there が生起する場面は、(23) に示す直示文が連続する場合と (24) に示す現存するものが知覚でき指示動作を伴うような場面である。(因に、大文字はストレスのあることを示している。)

- (23) a. THERE'S a DOG!
 b. There's a CAT!
 c. There's a PIG!
- (24) A: What animals are there in the picture?
 B: Well...
 a. There's a dog, and
 b. there's a cat, and
 c. there's a pig... (Johnson 2001:129)

が、何故このような現象が here 構文で生じなかったのかについては議論されていない。

このような理由から、本稿では、問題の虚辞の there は場所の指示副詞が意味の漂白によって文法化した要素すなわち抽象的な場所を示すと考える。抽象的な場所は、無限のあらゆる場所を包含できる無限の空間でなくてはならない。それには、遠近による「幅」の存在が不可欠となり、話し手に近接的な here では遠方を含む無限の空間を指示することは不可能となる。文法化の視点から換言すると、虚辞の選択の問題は、初期の語彙的意味(の痕跡)が抽象的意味への虚辞化を制約するという持続性 (persistence) と呼ばれる現象の一例と考えられる。

更に、度量のスケール (scale) をプラスマイナスの視点から二分して見た場合、近接はゼロ (あるいはマイナス) であるのに対して、遠方はプラス (つまり肯定的 (positive)) と言える。そうすると、中和形は、一般的に肯定的表現を好む傾向があると言えるかもしれない。この傾向は、上記 (19)-(22) の議論からは支持されるものであるが、言語一般について言えるかどうかは詳細な調査が必要である。¹⁵

以上の議論では、虚辞の there の発達は中和形への発達と解釈でき、文法化および認知の視点から見て一般的な現象であると主張した。

4. 結 語

本稿での議論は以下のようにまとめられる。

- (25) a. 英語の虚辞 (主語) の there は、虚辞の it と異なり項の資格を持たないが、語用論的・談話論的意味を持たらず言語学的に有意義な要素である。
 b. 場所副詞の there とそこから文法化した虚辞の there の意味関係は、多義性あるいは同音異義性というよりは中和の関係として捉えるのがより生産的である。
 c. 場所副詞の there が中和形の度量スケールの設定として認知的に妥当であるため、文法化が場所副詞の here でなく there に起こった。

第一節で述べたように、本稿は英語の虚辞 (主語) の there の特性に焦点を当てながら日英語の比較対照研究を行うための序章として位置づけられるものである。従って、本稿で触れた事項の中にはまだ詳細に議論すべきものがある。例えば、日本語に於ける虚辞の存在、there 構文と日本語の存在文の通時的・共時的特性の比較対照等である。これらの課題の取り組みについては、別の機会に譲りたい。

注

*草稿の段階で阿部幸一氏 (愛知工業大学教授) から貴重なコメントを戴いた。また、廣瀬 (2003) は、本稿作成の一つの動機付けとなった。ここに記して感謝したい。

¹ 文法化の概念の定義は、下記の Hopper and Traugott (2003²: xv) に従っている。

(i) To avoid further terminological confusion, we now define grammaticalization as the change whereby lexical items and constructions come in certain linguistic contexts to serve grammatical functions and, once grammaticalized, continue to develop new grammatical functions.

即ち、文法化とは、「語彙項目と構文がある一定の言語的文脈において文法的機能を果たすようになり、一度文法化すれば引き続き新しい文法的機能を発達させる変化」として定義されている。初版本(1993)では、文法化は「変化」というよりむしろ「過程(process)」と定義されていた。

因に、Traugott(1986:542)は、虚辞(即ち存在)のthereの発達を談話外の状況を指示していたものが談話内の状況を指示するようになった発達の一例(即ち意味変化における主観化(subjectification))の一例として言及している。

² 荒木・安井(1992)では、expletive pronoun(虚辞の代名詞)の見出しの中で虚辞についてもう少し詳細な定義と解説が見られるが、用語そのものの定義は(1)とほぼ同様である。

因に、『新明解国語辞典(第六版)』(2005)は、「虚辞」を「本当でない言葉」の意の漢語的表現と定義し、「 を設ける[=うそをつく]」の用例を挙げている。しかし、このことから、日本語には英語に見られるような虚辞は存在しないと即断できない。虚辞の有無については、日本語の「主語」の概念同様に、虚辞自体の文法的範疇が理論的構築物であるため、議論の余地があるように思える。

³ ここでは、(2a-d)の表層上の語順についての関係を記述しているだけである。本稿では、ある特定の派生方法を仮定してはいない。

⁴ Birner and Ward(1998)は、there構文の意味上の主語は聞き手にとっての新情報を伝えるものであるが、thereの無い倒置文に於ける後置主語は談話における新情報を伝えると主張している。

⁵ 中右(1998)の主語条件は意味論的で専ら主語の有形性を問題にしている。従って、中右(1998)は(7f)を非文と予測してしまう。これに対して、Huddleston and Pullum(2002)の主語条件は先行文脈をも射程に入れた語用論的・談話論的なものであると言える。因に、中右(1998:81)は、there構文は「認識領域(概念的知識領域)に属する実体の存在を記述する様式」であるのに対して、thereの無い構文は「視覚領域に属する実体の存在を記述する様式」であるという示唆的な主張をしている。

⁶ 但し、(i)が示すように、主語名詞句と場所語句を繋ぐbe動詞も(文意を保持したままでは)to beを省略できない。

(i) I believe the three cows*(to be) in the garden.

本稿では、(2a,c)におけるbe動詞はthere構文に生起するbe動詞とは全く同じものとは考えていない。Levin and Rappoport Hovav(1995:152)に依れば、Kirsner(1973:110)は(11a)のremainには「三人の男たちが部屋に故意に留まることを選んだ」という動作主的な読みがあるが、there構文の(11b)のremainには動作主的な読みはないと述べている。

(ii) a. Three men remained in the room,

b. There remained three men in the room.

また、影山(1996:39)も、(11c)を挙げて副詞reluctantlyとの共起可能性の視点から、同様の主張をしている。

(iii) a. The Queen stood in front of them reluctantly.

b. *There stood the Queen in front of them reluctantly.

be動詞は、この動作主性とは直接結びつけられないが、there構文に共起する動詞は、動作主性を打ち消すような強い非動作主的な存在や自然発生的意味(つまり非対格的意味)を持つものに限定されると言っても良いであろう。

⁷ Huddleston and Pullum(2002:1482, fn.16)は、周辺的なくだけた(casual)文体においては、天候のitが意味内容を持つ代名詞として振る舞うことがあるとして、以下の例を挙げている。(%の付いた文は、方言によっては文法的であると見なされることを示している。)

(i) a. It is trying to rain.

b. %It rained and flooded the basement.

(ia)のitは、tryの主語として機能し、擬人化によって動作主の役割を果たしている。(ib)のitは、非天候動詞floodを含む動詞句との等位句の主語で、水浸しにする行為者の意味がある。

因に、Shakespeareからの例(ii)から分かるように、虚辞のitはthereと同等の用法を近代英語期まで保持していたようである。

(ii) Sir, 'tis your brother Cassius at the door, who doth desire to see you. (Caes. II. i. 70-1)

⁸ (11a)のノルウェー語とスウェーデン語には、det(=it)があり、イタリア語には空の虚辞のproが存在する。(11c)のドイツ語、イディッシュ語、アイスランド語では、IP-specにおいてはitと虚辞主語の空範疇proの間で相違があるが、CP-specにおいては相違はないと、Vikner(1995)は述べている。

⁹ 竹沢(2003:67, n.2)も指摘しているように、理論的には日本語にもイタリア語のような空の虚辞が存在するという可能性が無い訳ではない。ゲルマン諸語における虚辞主語については、Vikner(1995)参照。

¹⁰ Breivik(1983)によれば、虚辞のthereの用法は古英語期から存在していたが、there構文が確立したのは初期近代英語期である。

¹¹ Malmkjær and Anderson(1991)参照。

¹² Kiparsky(1968, 1973)と荒木・安井(1992)参照。

¹³ この現象は英語に限ったものではなく、日本語でも「背の高さはどのくらいですか」と言えるが、「背の低さはどのくらいですか」とは通常の条件下では言わない。因に、「便利」は「不便」の対義語で、「買物が便利だ／不便だ」と言うが、「便利」が中和化（あるいは文法化）して「買物が便利がいい」という表現も存在する（『新明解』参照）。「水」と water や「米」の用法についての詳細な考察については、広瀬（2003）参照。

¹⁴ Bergen and Plauché (2005) は、(i) に示す仏語に於ける *voilà* 'there is' と *voici* 'here is' の直示構文と *il y a* 'there is' の存在構文は、英語の直示構文と存在構文とは歴史的起源と形態も異なるが、各構文は同様に中心的なものから周辺的なものへと収斂的進化 (convergent evolution) を示す、と主張している。

- (i) a. *Voilà / Voici les clés que tu cherchais.*
 'There / Here are the keys you were looking for.'
 b. *Il y a un chien dans la cuisine.*
 'There's a dog in the kitchen.'

しかしながら、仏語の存在構文として *voilà* 'there is' (あるいは *voici* 'here is') でなくて *il y a* 'there is' の構文が何故発達し一般化したかについては議論も無く明らかにされていない。詳細は Bergen and Plauché (2005) 参照。

¹⁵ 日本語でも「背の高さ」、「年は幾つ」、「明日の天気」などにおける中和表現は、「背が高い」、「彼は年だ」、「明日は天気だ」等の表現から窺えるように、すべてプラスの値を示す表現が使用されている。

参考文献

- 荒木一雄 (編) (1999) 『英語学用語辞典』 東京：三省堂。
 荒木一雄・安井 稔 (編) (1992) 『現代英文法辞典』 東京：三省堂。
 Aronoff, Mark (1976) *Word Formation in Generative Grammar*. Cambridge, Mass : MIT Press.
 Bennis, Hans (1986) *Gaps and Dummies*. Dordrecht : Foris Publications.
 Bergen, Benjamin K. and Madelaine C. Plauché (2005) "The Convergent Evolution of Radial Constructions. : French and English Deictics and Existentials," *Cognitive Linguistics* 16,1-42.
 Birner, Betty J. and Gregory Ward (1998) *Information Status and Noncanonical Word Order in English*, Amsterdam : John Benjamins.
 Bolinger, Dwight (1997) *Meaning and Form*. London : Longman.
 Breivik, Levi Egil (1983) *Existential There : A Synchronic and Diachronic Study*. Bergen : Department of English. Univ. of Bergen.
 広瀬幸生 (2003) 「H₂O をどう呼ぶか—対照研究における相対主義と認知主義 (上), (下)」『言語』6月号, 80-88 ; 7月号, 78-87.
 Hoekstra, Teun. (1983) "The Distribution of Sentential Complements," in Hans, Bennis and W.U.S. van Lessen Kloeke (eds.) *Linguistics in the Netherlands 1983*. 93-103, Dordrecht : Foris..
 Hopper, Paul J. and Elizabeth Closs Traugott, (1993, 2003) *Grammaticalization*, Cambridge : Cambridge University Press.
 Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. London : Longman.
 Johnson, Christopher (2001) "Constructional Grounding : On the Relation between Deictic and Existential *there*-Constructions in Acquisition," in Cienki, Alan, Barbara J. Luka and Michel B. Smith(eds.) *Conceptual and Discourse Factors in Linguistic Structure*. CSLI Publications, 123-136.
 影山太郎 (1996) 『動詞意味論』 東京：くろしお出版。
 Kiparsky, Paul (1968) *How Abstract is Phonology?*, Reproduced by the Indiana Univ. Linguistic Club. Reprinted in Fujimura, Osamu (1973) (ed.) *Three Dimensions of Linguistic Theory*, 5-56, Tokyo : TEC.
 Kirsner, R. S. (1973) "Natural Focus and Agentive Interpretation: On the Semantics of Dutch Expletive *er*," *Stanford Occasional papers in Linguistics* 3, 101-14.
 Lakoff, George, (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things*, Chicago : Chicago University Press.
 Lambrecht, Knud (1994) *Information Structure and Sentence Form*, Cambridge : Cambridge University Press.
 Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity : At the Syntax-lexical Semantic Interface*, Cambridge, Mass. : MIT Press.
 Malmkjær, Kirsten and James M. Anderson (1991) *The Linguistic Encyclopedia*, London : Routledge.
 Murray, James A. H. et al (1933) *The Oxford English Dictionary*. 13 vols. Oxford : Clarendon.
 中右 実 (1998) 「BE と HAVE からの発想—存在・所有・経験の型を探る—」中右 実・西村義樹『構文と事象構造』日英語比較選書 5, 55-106, 東京：研究社。
 Rothstein, Susan D. (1987) "Three Forms of English *be*," *MIT Working Papers in Linguistics* 9, 225-238.
 Svenonius, Peter (2002) "Introduction," in Svenonius, Peter (ed.) *Subject, Expletives, and the EPP*, 3-27, Oxford : Oxford

University Press.

Sweetser, Eve E. (1986) "Polysemy vs. Abstraction : Mutually Exclusive or Complementary?," *Berkeley Linguistic Society* 12, 528-538.

竹沢幸一 (2003) 「ある」と have / be の統語論」『言語』11月号, 61-68.

Traugott, Elizabeth Closs (1986) "From Polysemy to Internal Semantic Reconstruction," *Berkeley Linguistic Society* 12, 539-550.

Traugott, Elizabeth Closs and Richard B. Dasher (2002) *Regularity in Semantic Change*, Cambridge : Cambridge University Press.

Vikner, Sten (1995) *Verb Movement and Expletive Subjects in the Germanic Languages*, Oxford : Oxford University Press.

山田忠雄 (2005) 『新明解国語辞典 (第六版)』東京：三省堂.